

電力土木の歴史－第2編 電力土木人物史（その11）

正会員 稲松技術センター 稲松敏夫 （技術士）

H I S T O R Y O F E L E C T R I C C I V I L E N G I N E E R I N G
－ P a r t 2 H I S T O R Y O F e l e c t r i c C i v i l E n g i n e e r .

b y T o s h i o I n a m a t s u .

概 要

筆者は先に第1回～第12回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に、各河川の水力開発について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。さらに9年前からその中60名の人々の業績を詳述し、第2編電力土木人物史として44名（知久清之助、伊藤令二、北松友義、目黒雄平、高桑鋼一郎、久保田豊、内海清温、熊川信之、岩本常次、吉田登、水越達雄、市浦繁、鶴飼孝造、和澤清吉、大林士一、金岩明、大橋康次、山本三男、味桂稔、中村光四郎、浅尾格、永田年、平井弥之助、野瀬正義、畑野正、田中治雄、石川栄次郎、藤本得、村田清逸、後藤壮介、泉悟策、田代信雄、吉田栄進、原文太郎、山家義雄、大西英一、山崎道美、渡辺時也、東正久、吉田勝英、畠山正、野田和郎、丸山二郎、高橋健）について発表し、今回はその11として数名を発表する。（明治～昭和期、土木、開発した人）（1分類 人物史、2分類 河川、エネルギー）

（I）総括

第1編各河川水力開発の変遷には、11年間にわたり、日本全国及び世界大戦前の朝鮮、中国、台湾、東南アジア、世界大戦後の東南アジア、ブラジル等の開発変遷とその開発に一生を捧げた人物60名を発掘した。

第2編電力土木人物史は9年にわたり、その内44名分をまとめた。

今回はその11として引つづき数名分を調査、発表する。

(Ⅱ) 知り得た成果

(1) 電力土木120年の人の流れの変遷

- (イ) 親分、子分時代から電力会社別地域別への流れ
- (ロ) 企画、設計、施工管理電力会社直営から、企画、施工管理は電力会社直営、設計はコンサルタントへ委託に移行した。

(2) 親子二代の電力土木屋

- ①北松（東北電力）②伊藤（電源開発）③知久（東京電力）④山本（中国電力）⑤大西（日本発送電）⑥大橋（北海道電力）など親子二代の電力土木屋が多くいることを発見した。

(3) 水力、火力、原子力の変遷

特に120年の電力土木の中70年は水力時代（ダム全盛）70年から85年（15年間）は火力時代、85年から120年（15年間）は原子力時代となり、水力時代の土木屋の活躍の場はダム全盛時代でダムの各タイプの開発に各電力会社が技術を競ったが、火力、原子力時代となって耐震設計、基礎地盤、港湾、取放水、安全審査、環境調査と多元的に活躍の場が拡大した。

(4) 世界大戦前の北朝鮮、韓国、台湾、海南島、佛印への電力開発への国際的協力から大戦後の南米、東南アジア、ヨーロッパへの電力開発への国際的協力へと展開が拡大していった。

(Ⅲ) 人物史（各論）

(1) 山田 勝則



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、今回は四国電力関係の山田勝則など6名を記述するため、鎌田文明氏（もと四国電力常務取締役）に資料、写真等をお願いし、それと、電力土木人物銘々伝（5章 四国電力）を参考に取りまとめた。お世話になった鎌田文明氏等四国電力の関係者ご家族等に心から感謝いたします。

(ロ) 山田勝則の年譜

明治37年2月3日 大分県に出生
昭和2年3月 九州大学土木工業科卒業
昭和2年4月 東邦電力（株）へ入社
昭和7年4月 日本窒素肥料に入社
中国大陸の水力開発に従事
昭和10年4月 台湾電力に入社
昭和21年4月 野口研究所に入所
河川の総合開発計画や全国の理論包蔵水力の調査に従事
昭和26年5月 四国電力に入社
常務取締役土木部長
（後に建設部長に名称変更）
昭和30年2月 建設部長の委嘱を解く。
昭和31年5月 取締役
昭和32年5月 取締役を辞任
四国電力を退社
昭和46年8月 逝去（67才）

(ハ) 業績と人となり

昭和2年九州大学卒業と同時に東邦電力に入社、その後台湾電力を経て日本窒素肥料にて中国大陆の水力開発に従事され戦後は野口研究所においてわが国河川の総合開発計画や全国の理論包蔵水力の調査等をされた。

電力再編成時、四国電力に招聘され常務取締役土木部長として当時の計画課長小沢章三氏及び工事課長浅尾 格氏を指揮し松尾川発電所など10数ヶ所の水力の計画、工事を指導された。特に各発電所には新技術、新工法を取り入れ土木構造物電気工作物を含めてそれぞれ、特徴を持ったものとするよう指導され四国電力土木陣に新風を吹き込まれた。

ウイスキーを好まれ毎日ボトルを空けられる酒豪であったが建設現場のみならず測量現場にも菅笠、地下足袋姿でぶらりと一人で来られ現場指揮される豪傑肌の土木屋であった。四国電力(株)取締役退任後は電力中央研究所理事、日本地熱調査会監事、日本大ダム会議専門委員等も歴任された。

(ニ) 私の山田勝則観

山田勝則は若い技術者として台湾電力、中国大陆の水力事業に奮闘し、戦後野口研究所においてわが国河川の総合開発計画や全国の包蔵水力の調査に挺身し、さらに昭和26年以降四国電力の常務取締役土木部長として松尾川発電所など10数ヶ所の水力の計画、工事を指導し、多くのダム発電所の建設に当時の小沢計画課長、浅尾工事課長等を指導して四国の電源開発に挺身し後年に及び電力中央研究所理事、日本地熱調査会監事、日本大ダム会議専門委員等歴任し、一生を電力土木界に捧げた数多くの先輩の1人である。

当時各電力にはそれぞれ経験豊富な指導者が後輩を指導され、日本のダム建設技術発電所建設技術、トンネル建設技術を世界に劣らないように努力された中、「四国に山田勝則あり」と筆者は聞いていた。私改めてその業績をまとめた結果、山田勝則の偉大さと豪放快活な人柄を偲び頭が下がる思いがする。

(2) 志波 勉



(イ) 志波勉の年譜

明治36年 6月25日	東京都に出生
大正12年 3月	東京高等工業学校電気科卒業
大正13年 4月	東京電灯へ入社
大正14年 4月	農商務省海外実習生として電気事業研究のため、北米合衆国に駐在WH社、引継いでGE社に実修生として入社
昭和2年 7月	同上課程終了退社、帰国
昭和2年 9月	三菱合資会社に入社 朝鮮長津江水力開発の調査設計に従事
昭和7年 9月	静岡市技師として電気部に勤務し発送変電の設計建設に従事
昭和14年 6月	神戸製鋼所に入社 屋久島水力開発の調査設計に従事した後、朝鮮神鋼金属の主任技術者として鴨丸江水力よりの発電設備の設計、建設に従事し終戦に伴い北朝鮮人民委員会に接収され、技術顧問として強制残留
昭和22年 4月	帰還し連合軍司令部経情科学局技術顧問に就任
昭和26年 9月	同退職
昭和26年11月	四国電力理事東京駐在
昭和27年11月	建設部次長
昭和30年 2月	建設部長

昭和33年 5月 取締役建設部長
 昭和36年 3月 取締役建設部技術研究所担当
 昭和37年 5月 常務取締役
 昭和39年 3月 常務取締役後四国電気高等学院長
 昭和42年 1月 四国電気高等院長委嘱を解く
 昭和45年 5月 四国電力退任
 四電エンジニアリング社長に新
 任
 昭和50年 5月 同社退任
 昭和60年 7月 逝去（84才）

(ロ) 業績と人となり

大正12年東京高等学校電気科を卒業と同時に東京電灯に入社、農商務省の海外実習生として北米合衆国に派遣され、電気事業の研究に従事したのを手始めに、年譜に見られるように5－7年置きに勤務先を変わり大平洋戦争末期には鴨線江の水力関連の設備工事に携っていたが終戦に伴い北朝鮮人民委員会に接収され、技術顧問として強制的に残留された。

昭和22年帰還後は連合軍総司令部経済科学局の技術顧問で活躍の後26年に四国電力に理事として迎え入れられた。四国電力では建設部次長として電気課を担当し山田部長を補佐した後、取締役建設部長として草創期の水力電源開発に貢献した。さらに常務取締役に就任後は四国電気高等学院長の要職にも就き、豊富な知識と経験により若い電気技術者の指導育成に当たられ有能な人材の発掘につとめた。

45年に退任後は四電エンジニアリングの初代社長に就任され5年間にわたって、エンジニアリング会社の進むべき方向の陣頭指揮をされ優良企業としての揺るぎない基礎固めを行ない今日の発展を見ることができた。

多くの職場で多彩な人達の交わりで苦勞された志波さんは極めて人当たりが良く、そのソフトな語り口は人々を魅了した。

(ハ) 私の志波勉観

北米合衆国への2年半にわたる電力会社への実習や北朝鮮鴨線江水電関係の業務やさらに連合軍の技術顧問、さらに四国電力の常務取締役建

設部長等多彩な生涯の中で、多くの人々との温かい交流等今経歴をみて、後輩として多大の感銘を受けた。

(3) 小沢 章三



(イ) 小沢章三の年譜

大正2年 8月9日 尼崎市に出生
 昭和11年 3月 京都大学土木工学科卒業
 昭和11年 4月 伊予鉄道電気へ入社
 昭和16年10月 日本発送電へ入社
 中国水力事務所を中心に調査に
 従事
 昭和22年10月 岡山支社土木課長
 昭和24年 4月 四国支店土木部工事課長
 昭和25年 5月 第五黒川水力建設所長
 昭和26年 5月 四国電力に引継入社
 土木部計画課長
 昭和27年 4月 建設部計画課長
 昭和31年 3月 建設部課長土木部長兼務
 昭和33年 8月 建設部次長、計画課、土木課
 昭和36年 3月 建設部長
 昭和39年 8月 技術研究所長
 昭和41年 2月 支配人、技術研究所長
 昭和43年 1月 四国電力を退職
 昭和43年 2月 高松高等専門学校土木工学科
 主任教授

昭和48年6月 逝去（59才）

（ロ）業績と人となり

昭和11年京都大学卒業と同時に伊予電気鉄道に入社、ようやく黎明期を迎えた四国の水力開発に身を投じた。電力統合時代に入って日本発送電の中国地方で約8年間戦中戦後の電力の供給確保につとめた後、昭和25年に第五黒川建設所長として再び四国に還り現場第一線で陣頭指揮をとった。

電力再編成と共に四国電力土木部計課長の要職につき常に漸新なアイデアにより短期間に数多くの開発計画をまとめ、戦後の水力電源開発ブームを盛り上げた。

さらに建設部次長、建設部長として計画課長時代に立案した仁淀川第三、広野、大森川の各発電所および穴内川分水計画等、四国電力の代表的水力開発を実施され、蔭平計画の基礎固めをされた後技術研究所所長の要職についた。

氏は水力のピーク対応を早くから予見し、大森川P/S（11,800kw34年運開）穴内川P/S（12,500kw39年運開）蔭平P/S（46,500kw43年運開）にポンプ、タービンによる揚水機能を付加し、全国に先駆けてそのメリットを説き今盛り



の揚水発展への道を拓いた。また、常に合理性さモットーとした信念は大森川、穴内川等の中

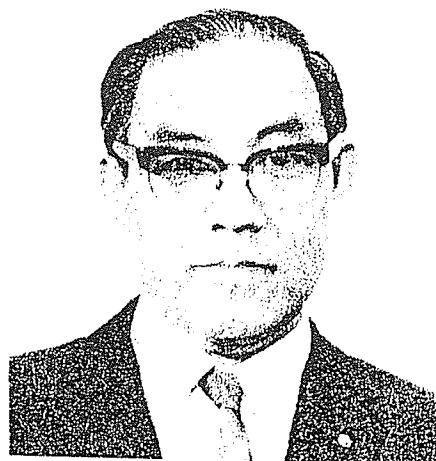
空重力ダムの採用に反映され、当時わが国には導入後日も浅く、山積する技術的問題点の解明に率先垂範され、その甲斐あって、37年に京都大学より工学博士の称号を送られた。

昭和43年定年退職と共に高松高等専門学校土木工学科の主任教授として迎えられ、後輩の育成に当たられ、その教え子達は各界の第一線で活躍し、四国電力でも有能な人材として育っている。小沢さんは頭脳の回転が極めて早く、われわれ俗人では容易にスピードについていけず、孤高の無聊をよくウイスキーで慰めておられたが、そのピッチは極めて早くせいぜい着にされるのが落ちであり、これが病魔につけ入られる端緒となり、59才の若さで逝去された。

（二）私の小沢章三観

小沢章三が四国電力の電力土木界の重鎮として現在の揚水式発電所の先鞭をつけた大森川、穴内川、蔭平の三発電の計画、開発、工事並びに大森川及び穴内川の中空重力式ダムの採用と設計、開発、工事に新しいアイデアを発揮実施する等すばらしい業績について、当時北陸電力で水力開発を担当していた筆者は、大先輩として、現場を見せていただいたり御指導を駆けた際、氏の頭脳の回転の早さと斬新なアイデアについていろいろ驚異と尊敬を感じた事を改めて思い出し感謝の念にたえない。

（4）山下 嘉治



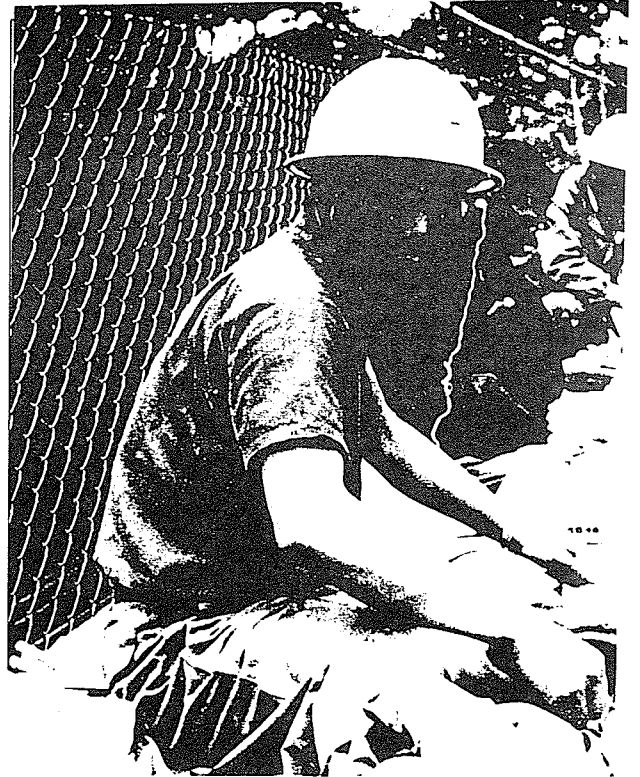
(イ) 山下嘉治の年譜

大正 5 年10月27日 京都市に出生
昭和16年12月 京都大学土木工学科卒業
昭和17年 7 月 日本発送電東海支店へ入社
丸山水力建設所を中心に東海地区の調査設計に従事
昭和26年 5 月 関西電力に引継入社
昭和29年 6 月 建設部土木課副長
昭和37年 7 月 黒部川第四水力建設所副長
昭和37年12月 黒部川第四水力建設所土木設計課長
昭和38年 3 月 四国電力に入社
建設部次長
昭和40年12月 建設部長
昭和43年 3 月 理事土木部長
昭和45年 5 月 取締役土木部長
昭和45年10月 取締役伊方原子力建設準備部長
昭和48年 6 月 取締役伊方原子力建設所長
昭和48年 8 月 取締役社長室調査役
昭和51年 3 月 四国電力を退職
昭和51年 4 月～昭和55年 6 月
四電エンジニアリング所属
昭和60年 6 月 逝去（69才）

(ロ) 業績と人となり

昭和16年戦時中第一回の繰り上げにより京都大学を卒業し、翌年日本発送電力へ入社し、東海支店にて水力の調査、設計業務に従事したが電力再編成により関西電力に移り、丸山の再開と同時に土木設計係長として、関西電力初の大工事といわれた丸山ダムの建設現場で活躍した。さらに黒部川第四水力の計画に携わり、昭和31年から現地でダム建設に従事した。高さ186mの大アーチダム、出力258kwの「クロヨン」を土木設計課長として立派に完成した後、38年春四国電力へ転じた。

四国電力では、建設部次長・部長・理事・土木部長として穴内川、蔭平等の水力建設を、また西条、坂出、阿南等の火力建設を指揮すると共に、島内をくまなく廻り、原子力地点調査に当たった。45年には取締役土木部長として伊方原子力地点調査の陣頭指揮をとり、同年秋には四



国電力初の原子力発電所となる伊方原子力建設準備所長に就任した。

着工のための地元交渉に日夜を別たずに身を投げうって奔走し、48年6月には、建設所となったが準備段階での2年余にわたる心労のため健康を害し、1号機の運開を待たずに51年3月退職されることになった。

引続き四電エンジニアリング顧問にさらには大阪産業大学工学部教授に就任へ豊富な知識と経験を後継の指導育成に活かしていたが60年6月急逝された。

温厚、篤実、謙虚な人柄は、原子力反対派の人々との対話にも違和感なく発揮され社内外での厚い信望を集めた。伊方発電所は現在3号機迄（総出力2,022kw）が運開健全な運転を続けて四国電力の50%近い販売、電力量を供給しているのは、初代所長として辛苦の末、着工に導いた山下さんの功績によるものといって過言ではなかろう。59年には「ダムコンクリート用骨材の最適設計と製作に関する基礎的研究」で工学博士の学位を取得した。

(ハ) 私の山下嘉治観

筆者が北陸電力の能登原子力発電所の計画、検査、設計を担当した際同じ頃、四国電力で調

査中の伊方原子力地点を豊島、鎌田の両氏の紹介で山下所長を訪れ、土木調査、地元交渉についていろいろ御指導を受けた事を今思い出している。

温厚な人柄の中に原子力建設への燃える様な決意を拝見しいろいろ御指導を受けた事柄を活かして能登原子力も着工に漕ぎつけた事を思い出して今改めて感謝の気持ちで一杯である。

(5) 喜多 梅記

ナキ



(イ) 喜多梅記の年譜

大正9年5月20日 鳴門市に出生
昭和16年3月 徳島高等工業学校土木科卒業
昭和16年4月 日本発送電四国支社へ入社
昭和26年5月 四国電力に引継入社
松尾川水力建設所第一工事所
堰堤係長でダム建設に従事
昭和30年4月 建設部 計画調査課長
昭和32年5月 広野水力発電所土木課長
昭和35年6月 建設部開発土木係長
昭和38年5月 愛媛支店土木課長
昭和41年3月 建設部次長
昭和43年3月 土木部次長（名称変更）
昭和45年10月 土木部長
昭和49年5月 理事土木部長
昭和51年3月 理事建設本部副本部長
昭和52年3月 理事四電エンジニアリング出向

昭和52年6月 定年により四国電力を退職
現在高松市に健在83才

(ロ) 業績と人となり

昭和16年徳島高等工業学校卒業と同時に、日本発送電四国支店へ入社し、池田事務所を中心に調査設計業務に従事したが、電力再編成により四国電力に移った後は、早速松尾川ダム（高さ67m重力ダム）建設現場で堰堤係長として活躍した。

昭和30年から2年間建設所計画調査係長を経て再び広野水力（35,000kw）の建設現場に土木課長として職責を全うした。

その後建設部および愛媛支店勤務後41年に建設部次長、95年に山下部長の後任として土木部長の要職に就任した。

当時は自社単独の水力開発は、一段落し河川総合開発に参加して、池田、天神（吉野川）、大渡（仁淀川）等の水力建設をまた西条、坂出、阿南等の火力建設を指導すると共に次期純揚水地点の選定に当たった。

伊方原子力1号機の運用の目鼻がつくと共に本川純揚水（60万kw・落差549m）の着工に備えて51年に理事、建設本部副本部長の要職に就任し浅尾本部長を補佐した。

52年に四国電力を退職し、地質調査業にタッチしておられたが現在は高松市で悠々自適の生活を送っている。

喜多さんは無口で必要最小限の事しか言われないが頭脳明晰でわれわれ俗人では咄嗟に判断ができなくて後で成程と思うことが度々あった。また斗酒なお辞さない酒豪で酔い崩れた姿を見せたことはない紳士である。

(ハ) 私の喜多梅記観

全国の電力会社土木建設部長会議に四国電力の喜多部長等と北陸電力から筆者等が参加して水力、火力、原子力の土木建設工事の問題点等を打ち合わせした際、無口ではあるがしっかりと将来を見据えた喜多部長の意見に一同感心したことを今、思い起こしている。

現在、高松市でご健在の由、一度お尋ねして懐

旧談をしたいと思っている。

昭和56年 3 月 奥村組四国支店次長

平成 3 年 2 月 逝去 (67才)

(6) 豊嶋 幸次



(イ) 豊嶋幸次の年譜

大正13年 2 月11日 大分市に出生
昭和18年 9 月 金沢高等工業学校土木科卒業
昭和18年10月 日本発送電四国支店へ入社
昭和26年 5 月 四国電力土木部に引継入社
昭和38年 5 月 建設部土木課長
電力土木設備維持管理
昭和43年 3 月 土木部火力土木課長
水力建設の一段落に伴う部の名称変更により火力原子力担当となる。
昭和45年10月 伊方原子力建設準備所所長代理
昭和48年 4 月 伊方原子力建設所次長
(土木担当)
昭和49年 6 月 建設室土木部長
昭和51年 3 月 建設本部建設技術部長
昭和52年 3 月 四国エンジニアリング出向
土木建設部長
昭和56年 2 月 定年により四国電力を退職

(ロ) 業績と人となり

昭和18年金沢高等工業卒業と同時に日本発送電四国支店へ入社し、新居浜を中心に水力の調査、設計業務に従事したが電力再編成により四国電力に移った後は土木部工事課で機械担当となり水圧鉄管門扉関係に精通し社内における第一人者となった。

昭和38年には、建設部土木課長に就任し、電力土木設備の維持管理にその人を得たが、43年には水力建設の一段落に伴ない嘗て最盛期を迎えてた火力建設の土木課長に転じた。

45年には伊方原子力建設準備所の所長代理として山下所長を補佐し、地元折衝を兼ねた後、48年建設にゴーサインが出てからは土木担当の補佐として部下の指導を行った。

49年には建設部の土木部長、さらには建設技術部長として伊方原子力の耐震設計及び反対派



の訴訟関係の対応に当たったが、52年には技術研究所長の要職についた。

54年には四電エンジニアリングに出向し、土

木監理部長として後進の指導に当たった後、56年四国電力を定年退職し、奥村組四国支店次長に迎え入れられたが、平成3年2月に急逝された。

豊嶋さんは非常に几帳面な方で、また、メモ魔ともいわれ会議などでは独特の速記術で落ちなく記録をとっておられたので、後々問題の解決に役立つことが多かった。

また、昭和39年に新幹線の食堂で、当時のアサヒビールの山本社長と同席して以来、すっかりアサヒビールの愛好者となり、他のビールを注ごうものなら機嫌が悪かった。今となっては、パンチのきいたスーパードライを口にした時の彼の表情を見る事ができないのは残念である。

(ハ) 私の豊嶋幸次観

四国電力の水力、電力、原子力特に伊方原子力の調査、補償交渉等について、北陸電力の水力、火力、原子力、特に能登原子力の調査補償交渉等を担当していた筆者は、豊嶋さんを通じてお互いの現場等を案内していただいたり、山下所長、豊嶋次長等を直接現地でお尋ねしていろいろ御指導をいただいた時の熱心な御指導について、今改めて感謝の気持ちで一杯である。残念ながら急逝されたが、富山で奥様御同伴で金沢高等工業学校の同窓会に出席の後、お目にかかった姿は今もって忘れられない。

豊嶋さん、安らかに眠り下さい。



(Ⅳ) 電力土木人物史のまとめ

以上、各地域及び勤務先別に取りまとめると、次表の通りである。現在50名であるが引きつづき60名とりまとめて完とする予定である。

	地域別及び勤務先別	氏 名
①	通 産 省 関 係	(目黒 雄平) (渡辺 時也) (市浦 繁) 畠山 正 野田 和郎
②	日 本 発 送 電	内海 清温 大西 英一 (石川栄次郎)
③	電 源 開 発	伊藤 令二 永田 年 浅尾 格 吉田 勝英 (野瀬 正義)
④	電力技術研究所	(大西 英一) (平井弥之助) 畑野 正 田中 治雄
⑤	北 海 道 電 力	(永田 年) 岩本 常次 大橋 康次
⑥	東 北 電 力	北村 友義 平井弥之助 後藤 荘介 矢崎 道美 吉田 栄延 山家 義雄
⑦	東 京 電 力	和久清之助 (永田 年) 水越 達雄
⑧	中 部 電 力	石川栄次郎 高桑鋼一郎 藤本 得 渡辺 時也
⑨	北 陸 電 力	鵜飼 孝造 和沢 清吉 大林 士一 (市浦 繁) 金岩 明 高橋 建
⑩	関 西 電 力	目黒 雄平 野瀬 正義 吉田 登 東 正久 丸山 二郎
⑪	中 国 電 力	山本 三男 味埜 稔 村田 清逸 泉 悟策 原文太郎
⑫	四 国 電 力	(浅尾 格) 山田 勝則 志波 勉 小沢 章三 山下 嘉治 喜多 梅記 豊嶋幸次
⑬	九 州 電 力	能川 信之 中村光四郎 田代信雄
⑭	コンサルタント関係等	久保田 豊 (内海 清温) (能川 信之) (中村光四郎)

(Ⅴ) 終りに

本編を取纏めるにあたり御家族、電力会社、会社等の多大なる御支援をいただき、履歴書業績、人となり等に関する資料の提供をうけた事について、心から感謝申し上げます。(以上)